

琉球大学学術リポジトリ

教育老年学の導入に関する実践報告 －高等学校での授業実践を通して－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2012-12-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下地, 敏洋 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25519

教育老年学の導入に関する実践報告

—高等学校での授業実践を通して—

下地 敏洋*

A Case Study on How to Teach Educational Gerontology: A Lesson from High Schools in Okinawa

Toshihiro SHIMOJI

Summary

This article aims at considering the possibility of introducing educational gerontology into Japanese high schools as a regular class based on the results of the questionnaire of the understanding of the elderly and the observation of the classes. Japan is a mature society with an elderly population, aged 65 years or over, of 2,958 million accounting for 23.1 percent of the population. The Japanese government has recognized the importance and the necessity of interdisciplinary research programs such as gerontology in college and graduate levels, but there are few universities with gerontology programs in Japan.

In the U.S., the Gerontological Society of America and the Association for Gerontology in Higher Education have already been established and 37 universities have masters programs and five universities have doctoral programs in gerontology. As a result, some of high school students have opportunities to study the aging process and think about their own later years.

The results show that high school students involved don't understand the real aging process and the elderly well. Now it is the best time that we set up educational gerontology programs for students in the early life stages to improve the understanding of the real aging process and QOL in the later years, and to decrease discrimination and prejudice toward senior citizens.

However, introducing educational gerontology programs into high schools has several problems such as teacher training programs to teach gerontology and teacher's qualifications, and school curriculums.

* 琉球大学教育学部

本実践報告は、高等学校2校において、著者が「高齢者を理解する」のタイトルで出前授業を実施し、高校生の高齢者に対する理解度及び高齢期に対する意識に関する特徴を明らかにし、教育老年学を教育現場で実施することの意義や可能性などについて検討することを目的とする。

1. はじめに

内閣府の発表(2011年)によると、我が国の総人口に占める65歳以上の高齢者の割合は23.1%(2010年)となり、超高齢社会を迎えている。また、65歳以上の人口は2,958万人(女性1,693万人、男性1,264万人)を超え、過去最高の人数となった。この傾向は今後も続くと考えられ、平成25年(2013年)、我が国の総人口に占める65歳以上の高齢者は25.21パーセントで4人に1人、2030年には31.8%で3.2人に1人、2055年には40.5パーセントで2.5人に1人が65歳以上になるものと予測される。75歳以上の高齢者が総人口に占める割合も上昇を続け、2055年には26.5%となり¹⁾、4人に1人が75歳以上になるものと予測される。

また、平均寿命は1935年の男性46.92歳、女性49.63歳から、2008年に男性79.29歳、女性86.05歳と延びた。2055年には男性83.67歳、女性90.34歳になるものと予測され¹⁾、我が国は世界のどの国も経験したことのない超高齢社会を短期間で迎えることになる。そのため、日本国民の英知を結集した取り組みが求められている。

このような状況の中で、全国の小学校、中学校、高等学校において、高齢者あるいは老化に関する授業を正規のものとして実施している実践例の報告はみられない。学習指導要領(高等学校)では、保健(保健体育)の「生涯を通じる健康」と生活と福祉(家庭科)の「高齢者の自立生活支援と介護」などで指導することが示されており、授業の中で単元の一部として取り扱っている。そのため、高齢者や高齢期、正しい老化の過程を理解させることの取り組みは、十分とは言えない。

また、国内の大学では、老年医学の講座が全国80の医科大学あるいは医学部の約4分の1で

設置されているが、学際的な学問としての老年学は、大学院レベル又は学部レベルでも講座あるいは研究科として設置されているものは少ない²⁾。現在、高齢者や老化に関する講義科目を設置している大学は桜美林大学のみであるが、修士課程及び博士課程を設置しており、老年学の領域に従事する研究者や実践家を養成している。2010年、東京大学ではジェロントロジーセンターを設置し、大学院レベルで学際的な老年学研究をスタートさせている。

一方、米国においては、1965年にThe Older Americans Actが通過して学際的な老年学教育が開始された。現在、学部課程が31大学、修士課程が37大学、博士課程が5大学で設置されている。1964年、南カリフォルニア大学に米国退職者協会の寄付金によりアンドラス・ジェロントロジーセンターが設立され、1975年に大学院を創設し、1989年より博士号を授与している。現在、学部課程、修士課程、博士課程を設置し、老年学教育及び研究の最先端にあって、世界の老年学に関する研究を牽引している。また、米国老年学協会、その傘下にある高等教育老年学協会、北テキサス大学を拠点とする全国高齢化教育学習学会の設立により、大学のみならず、幼・小・中・高校まで高齢者や老化に関する教育を生涯学習という視点に立って学ぶ機会が提供されている²⁾。

高齢期は、生き続ける限り誰もが経験する重要なライフステージであるにも関わらず、老化の過程を生涯発達の視点から捉えることの機会が欠如しており、衰退というイメージが先行する中、正しい老化の過程を学ぶことは十分とは言えない状況にある。このことが、高齢者に対する差別や偏見を生み出す要因ともなっており、自分自身の高齢期というライフステージにおけるQOLにも少なからず影響を与えているものと考えられる。柴田(1999年)も、「老年学は加齢学や高齢者に関する問題のみでなく、むしろ生涯発達理論や世代間問題をも研究する学問といえよう」と述べている³⁾。このことは、老年学の必要性和重要性を示唆しており、教育現場においても教育的視点に立って老年学を学ぶこ

との意義は十分であると考えられる。

高齢者や高齢期について十分な教育の機会が与えられていない教育現場で、幼児児童生徒に生涯発達の視点を踏まえ、高齢者及び高齢期について考える機会を提供することは、彼ら自身の人生そのものについて考えることで、現在から将来を見据えることができることになるものと考えられる。教育老年学は、老いの価値を探索し、教育を通して人生の完成期を見据える学問である。³⁾ このことは、現時点からの延長線上にある将来について、対話を重ねるための創造性を養成する機会と考えられる。

このように、高齢者や高齢期に対する理解を深化させることは、超高齢社会を生きる児童生徒にとって有益であり、教育老年学の導入の可能性に示唆を与えるものと考え、今回の授業を実施した。

従って、本稿は研究授業や高齢者に対するアンケート調査の実施を通して、高校生の高齢者や高齢期に対する興味・関心の把握及び高齢者に対する理解度を明らかにすることにある。また、そのことで教育現場において児童生徒が正しい老化の過程と高齢期について学ぶことのできる、教育老年学の導入の可能性についても報告する。

II. 教育老年学について

教育老年学とは、「高齢化と生涯学習の問題を、エイジングと成人の学びとを、より根本的な次元から結びつける新しい学問分野である。それは、高齢者への生涯学習という枠組みを超える体系でもある。老いの価値を探索する学問でもある。教育という視点から人生の後半部を見つめる学問でもある。」⁴⁾

つまり、教育老年学とは生涯発達と生涯学習をクロスさせた学問であり、老化を生涯発達の視点から見つめる学問であると言えるのではないだろうか。

また、教育老年学を授業として設定する理由について、次のように捉えることができる。

- ①高齢期を生涯発達の視点から捉えることで、高齢期そのものが単独に存続するのではな

く、現在の延長線上にあることを理解する機会となる。そのことで、将来に備えて、今何をすべきか、どのような人生設計をするのか、人生の意義等について考える機会とする。

- ②超高齢社会に生きる一人として、広い視野で社会の実情を捉えることを通して、自分自身の高齢期や地域社会の高齢者についても考え、かつ正しい老化の過程を理解することができる。
- ③キャリア教育の視点に立ち、将来の職業観を養い、将来経験するライフイベントを正しく捉えることで、将来の進路及び職業選択に役立てることができる。

なお、教育老年学の授業を実施することによる成果について、次のように捉えることができる。

- ①高齢社会と高齢者及び高齢期の特徴について、理解することができる。
- ②高齢期を正しく理解することで、高齢期に対する不安を軽減し、高齢者に対する差別や偏見をなくすることができる。
- ③人生の意義や生きることの意味を理解することができる。
- ④正しい老化のプロセスと生涯発達の完成期である高齢期を理解することができる。

III. 実践方法

調査対象者は、沖縄県南部と那覇市内にある普通高校のA校及びB校の1年生で、A校は38人（男性22人、女性16人）、B校は40人（男性17人、女性23人）である。実施時期は、A校が平成23年3月、B校が平成23年10月であった。

高等学校で計画している教育老年学のシラバスは、資料のとおりである。（資料1参照）

今回は、シラバスの授業計画の第1回目を改変し、次のとおり実施した。

1. 高齢者理解度アンケート調査

調査項目は、基本属性及び高齢者の理解度に関するものとした。基本属性は、①性、②学年、③高齢者と同居の有無などであった。高齢者の

理解度は①65歳以上の高齢者の大多数は認知症（記憶が落ちたり、ボケたりする）である、②高齢期では耳や目などのいわゆる五感が衰える傾向にある、③ほとんど全ての高齢者が、性に対する興味も関心ももっていない、④高齢期では心肺機能（肺活量）が低下する傾向がある、⑤少なくとも高齢者の10名中1人がナーシングホームや高齢者住宅等の長期滞在型施設で生活している、⑥高齢者のドライバーは65歳以下のドライバーと比べて交通事故が少ない、⑦ほとんどの高齢者は若い人ほど効率よく働くことができない、⑧高齢者の約80％は通常の生活行動ができる十分は健康状態にある、⑨ほとんどの高齢者は自分自身の考え方に固執しており柔軟性がない、⑩ほとんどの高齢者の反応時間は、遅くなる傾向がある、⑪大多数の高齢者は、社会的に孤立しており孤独である、⑫高齢の労働者は、若い労働者と比べて事故が少ない、⑬大多数の高齢者は、政府が定めている貧困基準を下回る収入しか得ていない、⑭大多数の高齢者は何らかの仕事に従事している、又はしたいと思っている、⑮高齢者は年齢とともにより宗教に興味・関心が高くなっていく、であった。

2. 高齢者に対するイメージ

アンケート調査用紙を回収後、全員に黙想してもらい、自分自身の65歳を想像してもらった。その後、数名の生徒の感想を共有した。結果は、高齢者に対する肯定的なものと否定的なイメージに分類することができた。肯定的な意見としては、「家族と一緒に楽しく過ごしている」、「自分の好きなことをして楽しそうである」、「友人と一緒に運動している」、「健康で孫と一緒に遊んでいる」、などであった。一方、否定的な意見としては、「一人でテレビを観ている」、「そばに誰もいない」、「施設で寂しそうである」、「耳が聞こえない」、「自分そのものがない」、などであった。自分自身の高齢期を想像するイメージは、現在の高齢者に対するイメージであると考えられていることから、これまでの生活環境や高齢者との交流体験が影響しているものと考えられる。

3. 高齢者の価値（若者の価値）

「あなたは、次の条件で明日から65歳の高齢者になることを受け入れることができますか」という問いで、高齢者を受け入れることの是非を確認した。

- (1) 年収が、3億円保証されている。
- (2) 65歳から平均寿命までの余命を健康で過ごすことが保証されている。
- (3) 衣食住は保証され、結婚し家族と生活することも保証されている。

上記の条件で、両校とも3名ずつの生徒が高齢者になることを受け入れにことに同意した。その主な理由は、「自分の好きなことが何でもできるから」、「自分の好きなものが何でも買えるから」、「楽しそう」などであった。他の生徒は、明日から高齢者になることに難色を示しており、若者としての価値そのものがいかに高いものであるのかについて理解することができる。

4. 日本の全人口に占める高齢者及び後期高齢者の割合

日本の高齢化率は、現在23.1%である。彼らが高齢期を生きる2055年には高齢化率が40.5%で、2.5人に一人が65歳以上の高齢者となることは、43年後に60歳を迎えた彼らが税金などの経済的負担がいかに大きいのかを予測させるものであり、自分自身の問題として捉えることの重要性を伝えた。将来的には、彼らの多くが祖父母、父母、子ども達、そして自分自身の生活をするための経済的負担をすることになるものと考えられる。

5. 先進地域、開発途上地域、アジア地域の高齢化率

6. 高齢者理解度の結果と説明

アンケート調査用紙を回収後、質問項目の確認と解答及び解説を行った。

この活動は、事前にアンケート調査を実施し、結果の分析を行い、実際の授業においてはグループ活動として討議を行い、発表することでさら

に内容が深まるもので考えられる。

8. 健康そうに見える60歳以上の男性著名人の紹介

9. 授業で学んだことや感想

- (1) これまで、自分が高齢者になることはあまり考えたことがなかったので、自分自身のこととして考える機会になった。
- (2) これまで自分が考えていた高齢者の様子が異なっていたので驚いた。
- (3) このように高齢者のことについて研究する専門があることを知らなかった。
- (4) 高齢者が考えた以上に健康であることがわかった。
- (5) 高齢者の多くが、施設などに入所しているかと思っただが、地域で生活している高齢者が多いということが勉強になった。
- (6) 高齢者は、普段どのような生活をしているのか疑問であったが、生活の様子がわかった。

(7) 2050年に高齢者が多くなり、平均寿命の90歳以上になることがわかって驚いた。

(8) 高齢者になっても性格がそれほど変化しないということがわかった。

V. 高齢者理解度アンケート調査の結果

「高齢者理解度」については、各質問項目に正誤で回答してもらった。

これらの質問は、高齢者に対する理解と偏見を検討する上から、重要であると考え実施した。質問項目と結果は、表1のとおりである。

本調査の結果は、アンケート調査の実施計画や対象者の年齢など基本属性が研究を目的としてデータが収集されていないため、先行研究との厳密な比較はできないが、今後の研究計画のために概要を把握することができる点において有益であるように考えられる。高齢者に対する考え方は、教育的介入がないと生涯を通して変化が少ないとも考えられ、かつ年齢が若いほど高齢者に対して客観的な考えを持てる傾向にあ

表1 加齢の事実をめぐるPalmoreのクイズと正答率

番号	質問項目	A高校			B高校		
		男性	女性	合計	男性	女性	合計
1	65歳以上の高齢者の大多数は、認知症(記憶が落ちたり、ボケたりする)である。	45.5	31.3	39.5	70.6	78.3	75.0
2	高齢期では、耳や目などいわゆる五感が衰える傾向にある。	100.0	93.8	94.9	100.0	100.0	100.0
3	ほとんど全ての高齢者が、性に対する興味も関心ももっていない。	36.4	31.3	34.2	58.8	73.9	67.5
4	高齢期で、心肺機能(肺活量)が低下する傾向がある。	95.5	87.5	92.1	88.2	87.0	87.5
5	少なくとも高齢者の10名中1人が、ナーシングホームや高齢者住宅等の長期滞在型施設で生活している。	45.5	43.8	44.7	47.1	52.2	50.0
6	高齢者のドライバーは、65歳以下のドライバーと比べて交通事故が少ない。	4.5	18.8	10.5	29.4	43.5	37.5
7	ほとんどの高齢者は、若い人ほど効率よく働くことができない。	27.3	68.8	44.7	23.5	39.1	32.5
8	高齢者の約80%は、通常的生活行動ができる十分な健康状態にある。	40.9	62.5	50.0	58.8	52.2	55.0
9	ほとんどの高齢者は、自分自身の考え方に固執しており、柔軟性がない。	31.8	31.3	31.6	58.8	56.5	57.5
10	ほとんどの高齢者の反応時間は、遅くなる傾向がある。	81.8	68.8	76.3	88.2	91.3	90.0
11	大多数の高齢者は、社会的に孤立しており、孤独である。	59.1	78.4	57.9	70.6	60.9	65.0
12	高齢の労働時間は、若い労働者と比べて職場での事故が少ない。	40.9	27.0	36.8	41.2	47.8	45.0
13	大多数の高齢者は、政府が定めている貧困基準を下回る収入しか得ていない。	36.4	51.4	36.8	41.2	34.8	37.5
14	大多数の高齢者は、何らかの仕事に従事している、又はしたいと思っている。	77.3	86.5	73.7	70.6	87.0	80.0
15	高齢者は、年齢とともにより宗教に興味・関心が高くなっていく。	40.9	59.5	55.3	64.7	47.8	55.0
	合計平均	51.0	54.1	52.1	60.8	63.5	62.3

注：奇数番号は誤り、偶数番号は正解となる

出典：Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH, 1988, p.423

るといわれている。先行研究では、日本の中壮年者は米国の対象者よりもはるかに強い老人差別をもっているが明確にされている²⁾。今回のアンケート調査結果も、高齢者が十分に理解されているとは言えず、教育的介入が必要な結果となっている。

正答率は、A校が合計52.1%、男性51.0%、女性53.8%、B校が合計62.3%、男性60.81%、女性63.5%で、女性の回答率が男性よりも高くなっていた。A校とB校の回答率に大きな差があるため、その要因について分析することは、高齢者理解のプログラムを計画する上で有益であると考えられる。

これまでの先行研究においても、女性の正答率が男性を比較して高くなる傾向が報告されるが、今回も同様結果となっている。

各質問の正答率は、A校とB校の両校で質問2、4の2項目において80%以上、質問5、6、7、12、13の5項目では50%以下であった。全体では、A高校で質問2、4の2項目においては80%以上、質問1、3、5、6、7、8、9、12、13の9項目では50%以下であった。一方、B高校では質問2、4、10、14の4項目では80%以上、質問5、6、7、12、13の5項目では50%以下であった。性別では、A高校の男性が質問1、4、10の3項目に80%以上、質問1、3、5、6、7、8、9、12、13、15の10項目では50%以下であった。特に、質問6と7は4.5%と27.3%であった。一方、女性は質問2、4、14の3項目では80%以上、質問1、3、5、6、9、12の6項目では50%以下であった。特に、質問6と12は18.8%と27.0%であった。また、B高校の男性が質問2、4、10の3項目では80%以上、質問5、6、7、12、13の5項目では50%以下であった。特に、質問6と7の2項目は29.4%と23.5%であった。一方、女性は質問2、4、10、14の4項目では80%以上、質問6、7、12、13、15の5項目では50%以下であった。

VI. 考察

高校1年生の高齢者に対する理解度及び高齢期に対する意識に関する特徴について考察する。

高齢者の理解度調査の内容である高齢者の身体的及び精神的機能の現状に関する質問において、高齢者の現状が十分に理解されていないことが考えられる。正答率が合計でA高校が52.1%、B高校が62.31%で、それぞれ47.9%、37.7%が誤答であることから、高齢者が正しく理解されていないと考えられる。このことは、高齢者に対する偏見や差別意識と関連することも考えられる。男女比においては、A高校で男性50.1%、女性54.1%、B高校で男性60.8%、女性63.5%で女性の正答率が男性よりも高くなっていることはこれまでの先行研究においても、同様の結果となっている。平成21年8月、琉球大学の学生に実施した調査では、男性63.2%、女性69.3%であった。また、Donatelle(1988)によると、米国の調査結果では、学部学生の正答率は65%、大学院生80%、大学教官90%であると報告している⁵⁾。このように、教育水準が高くなるにつれて、正答率も高くなる傾向にあると考えられる。今回授業を実施した両校は高校であり、正答率が高くなるはならないと推測されるが、興味深い結果がみられる。

最初に、A校の解答率が52.1%、B校の正答率は62.3%であるが、この差の要因はどこにあるのだろうか。そのことを明らかにすることで、高齢者理解の教育を高校でどのように進めていくことが効果的であるのかについて何らかの示唆を与えてくれるのではないだろうか。B校では家族の中に高齢者が同居している生徒は7名であり、それほど高いとはいえないことから考えると同居することそのものが必ずしも高齢者を理解することに結びつくのではなく、他の要因を推測する必要がある。

次に、各質問の解答の特徴を考えてみたい。

質問2と4の2項目における正答率は80%を上回っており、「高齢期では、耳や目などのいわゆる五感のすべてが衰えがちである」と「高齢期では、心肺機能（肺活量）が低下する傾向にある」など、病気や身体面の老化については、概ね理解されていると推測される。しかしながら、他の13項目では80%を下回っていることから、小学校、中学校、高校においては、学習の

機会を通して、正しい老化の過程や高齢者の実情を学ぶ必要性があると考えられる。特に、質問5と13の2項目において、解答率が40%以下となっており、高齢者と児童生徒との交流など普段の関わりが十分でなく、高齢者の実態が理解されておらず、社会学的な領域からのアプローチが必要であると考えられる。質問13においても合計正答率がA校36.8%とB校37.5%で、「大多数の高齢者が貧困である」と考える傾向にあるものと推測される。

高校生と比較した結果はないものの、このような傾向は、柴田(2000年)が実施した研究でも同様な傾向となっている²⁾。このことについて、柴田は、老年学の研究が熟していない時期においては、社会の中で支援ニーズの高い障害や貧困者等の高齢者にのみが注目されるので、偏見が生まれやすい環境にあると述べている。このことは、社会が成熟し、教育の機会が提供されることで正しい老化の過程が理解され、かつ高齢者の実態が明確となり、高齢者に対する差別や偏見がなくなることを示唆するものと考えられる。

誰もが、長寿を生きると経験する高齢期や高齢者については、人生設計というキャリア教育の視点からも大切なことであり、人生の早期段階で理解するための教育の機会が必要ではないだろうか。そのような取り組みの中で、交流が鍵を握るものと考えられる。

高校生や大学生など若者が高齢者との交流を通して、学ぶことの意義は何であろうか。堀(1999年)は、①高齢者の多くが職業や人間関係などをはじめとする知識や技能に関する教育プログラムに寄与する専門的知識に精通していること、②学習を普段の生活の中で応用していく能力に優れていること、③高齢者には多くの経験があり人生の価値など人間が生きる上で大切なことを理解している、の3点を挙げている⁴⁾。このようなことを踏まえて、交流を促進することで、若い世代の役割モデルとしての高齢者から人生で大切なことを学ぶことができるものと考えられる。

高齢者理解に関するアンケート調査の結果か

ら、「老人になると肺活量が落ちる」や「多くの老人はわかり人より反応時間が長い」など生理的側面の偏見及び「多くの老人は社会的に孤立しており、また寂しいものだ」など心理的側面の偏見は弱いものの、「ほとんどの老人は若い人ほど効率よく働けない」や「65歳以上の車の運転者は若い人より事故を起こしにくい」など効率性・適応の偏見及び「老人の10人に1人は老健施設等で長期に暮らしている」や「大多数の高齢者は、政府が定めている貧困基準を下回る収入しか得ていない」など社会状況的側面に対する偏見が強いことが理解できる。今回の傾向は、大学生と同様の結果となっている。

また、高齢者に対する偏見形成過程について、堀(1999年)は、大学生を対象とした研究を通して、マス・メディアなどを介しての影響よりも高齢者と実際に交流や接触があることが老化への理解を深め、偏見をなくすことを担っているのではないかと述べている。⁶⁾ 同様のことが、高校生にも当てはまることを考えると、今後、高齢者施設などにおいて児童生徒と高齢者の交流促進、学校現場へ高齢者を講師として招聘することなどが、老人差別や偏見の解消に寄与することの可能性について検証する必要がある。正しい情報に基づいた老人観を育てるためにも高齢期に関する教育の在り方が重要であると考えられる。

このような状況において、正しい老化の過程や高齢者の実態を理解し、高齢者に対する偏見や差別是正の観点から教育老年学を教育現場に導入することは、価値があるものと考えられる。そのことが、超高齢社会を迎え、多くの人々が高齢期を経験する我が国においては、高齢期を経験することの過度の恐怖を和らげることに役立つものと考えられる。また、高齢期に生涯発達の視点を取り入れることで、将来、現在の高校生が高齢者の仲間入りをする時、彼らの生活満足度や幸福感を高めることに寄与するものと考えられる。

しかしながら、教育老年学を学校現場に導入する際、課題が多いことも避けては通れない事

実である。堀（2006年）も指摘しているように、教育現場における教育課程、指導者など従来の学校教育と一線を画しているからである。⁷⁾ また、教育老年学も学部課程を修了し、かつ修士課程や博士課程で学ぶという現実、死生観を取り扱う生命倫理観など、人生そのものを扱う見識を備えていることも求められるからである。

いずれにしても、私達は高齢期を生きることが明らかであるが、このライフステージで生起する問題の多くは、高齢期で突然生起するものではない。高齢期は、人生の延長線上にある最終ステージであり、人生の完成期なのである。生涯発達の視点から人生そのものを捉える必要がある。

従って、今後も教育老年学を教育現場で導入するための努力を継続することに価値があるものとする。

引用文献

1) 高齢社会白書（内閣府）：

http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2011/zenbun/23pdf_index.html

入手日 2011年10月28日

- 2) 国際長寿センター：日本におけるジェロントロジー確立に関する報告書 2000.
- 3) 柴田博：アメリカ合衆国の老年学教育、老年社会科学、21(3)：358-371、1999.
- 4) 堀薫夫：教育老年学の構想－エイジングと生涯学習、ii、学文社、1999
- 5) Donatelle J. R., Davis G.L., Hoover F.C. Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH、p423、1988、Prentice-Hall, Inc. New Jersey.
- 6) 前掲書⁴⁾ p140
- 7) 堀薫夫：教育老年学の展開、p31、学文社、2006

参考図書

1. Donatelle J. R., Davis G.L., Hoover F.C. Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH 1988, Prentice-Hall, Inc. New Jersey.
2. 安藤進 他、老化のことを正しく知る本、東京、中央出版 2000.

「高齢社会と老年学」シラバス

- (1) 設置クラス： ション、レポート等から総合的に判断する。
- (2) 定 員：
- (3) 必修選択：
- (4) 受講年次：
- (5) 授業内容と方法
- 高齢社会、国際・情報化社会が進展する中、高齢社会と老化のプロセスを理解することは、生涯学習社会の構築を目指す上で、ますます重要なものとなっている。
- 高齢社会及び高齢期を理解する学問に、老年学がある。老年学とは、人間がどのように加齢変化していくのかについて医学、生物学、心理学、社会学的な領域から学際的に研究をする学問である。
- この授業においては、教育老年学として社会的及び心理学的な領域から正しい老化のプロセスを学ぶことで、高齢者や高齢期及び高齢社会について理解を深めることを目的としている。
- 本科目の授業内容は、高齢者及び高齢社会の定義及びその特徴、欧米における老年学の現状、老化理論、死の準備教育などについて多岐にわたる。すべての講義内容において、理論と実践の融合を目指し、「生涯発達」を共通のコンセプトとしてより学びを深め、演習することがねらいである。
- (6) 目標達成
- キャリア教育の視点から、老年学全般に関する興味・関心を高め、かつ理解を深めるとともに「人生の統合」について実践できる資質能力を身につける。
- (7) 評価基準と評価方法
- 観点別評価を設定し、総合で60点以上。授業でのディスカッション及びプレゼンテーション、レポート等から総合的に判断する。
- (8) 授業計画
- 第1回目 オリエンテーション（授業ガイダンス）
- ①授業内容説明
- ②レポート作成とプレゼンテーションについて
- ③その他
- 第2回目 高齢社会の定義と特徴
- 第3回目 高齢者の定義と特徴
- 第4回目 高齢者及び高齢期の理解
- 第4回目 老年学の定義及び領域
- 第5回目 欧米における老年学の現状
- 第6回目 老化理論
- 第7回目 寿命と老化
- 第8回目 若者と高齢者の相違点と類似点
- 第9回目 生涯発達から考える高齢期
- 第10回目 老いの意味
- 第11回目 老いの価値
- 第12回目 老年期の過ごし方
- 第13回目 サクセスフルエイジング
- 第14回目 死の準備教育
- 第15回目 講義のまとめ
- 第16回目 確認テスト
- (10) 教科書 調整中
- (11) 備考 詳細は、第1回講義の時（オリエンテーション）に説明する